

幸田露伴と未来——『露団々』の時間的考察

栗田香子

一 はじめに

幸田露伴は、明治日本において未来を描くことに初めて成功した作家である。彼の作家としてのデビューを飾った『露団々』(明22)においてそれは達成された。この事実は、明治文学を、時間、歴史の概念の変化を中心に見直すことにより明らかになる。

明治人の時間、歴史の概念が大きな変革を遂げる際に、最も重要な役割を果たしたのが未来の観念だった。明治人に西欧的未来観を最初に紹介したのは、オランダ人科学者、ディオスコリデス著『二〇六五年——未来警見』(一八六五)の二つの和訳であった。この小説の語り手は、当時の科学の目覚しい進歩について考え、将来はどうなるかと思いをめぐらすうちに、科学的、社会的な発展を上げた二〇六五年の未来社会、ロンドンニアに迷い込む。彼は、そこへ現れた、十三世紀の

科学者だが二十一世紀の住民になっているロジャー・ペーコンと、想像力を体現する若い女性ファンタジアの二人に案内してもらう。だが、三人ほか各国の乗客を乗せた飛行船がメルボルンに着こうとしたところで、語り手は目を覚まし、全てが白昼夢の中のできごとだったとわかる、という結末をもつ(1)。夢幻能にも似た構成を持つこの作品は、実に多くの明治作品に影響を与えた。たとえば政治小説の嚆矢として知られる戸田欽堂の『情海波瀾』(明13)は、和国屋民次と魁屋阿権が曲折を経て結婚するまでをごく簡単に描いたものだが阿権が「忽然トシテ醒メ来レバ、是レ阿権ガ酔餘假寝ノ一夢」であったことがわかるところで閉じていることは、欽堂が『二〇六五年』の和訳の影響を受けていたこと、そして後に触れるが、政治小説と未来記とが始め一心同体であったこととの証しである。

『露団々』にも政治小説、明治未来記の影響は明らかであ

るが、露伴はその常套的手法、また他作家の前例を批評的、弁証法的に用いることによって、そのジャンルを越えることに成功した。そのために露伴が参考にした作品のうち最も重要なのは、坪内逍遙の未来記^{内地}『雑語未来の夢』(明19)と、ワーズワースの *The Prelude* (序曲 一八五〇)であった。

現在進行形から近未来予測へ

明治期に、既存の時間、歴史の概念が西欧の概念を吸収しようとするに伴い、時間的表現、歴史叙述の方法が大きく変化したことは、新聞、雑誌において最も明らかであろう。歴史叙述は過去の出来事の集成としてではなく、時々刻々変化する現象の逐次の記録として広報され、把握される。『普請中』(明43)で森鷗外がこの現在進行形的状況を印象深く比喩的に記録する以前にも、「今ここ」が流動的、躍動的に看守されるようになっていたことを証明する発言は数多い。「今ここ」が流動する時間の中で捉えられるようになり、その現在進行形のダイナミックな時間の新しい認識が、新しい歴史意識を生み、未来像を推し量らんとするエネルギーの源となつたと考えられる。

現在進行形的認識は、自然界、人間社会におけるあらゆる事象とその変化の裏に、ある一定の規則を発見しようとした。過去の例から帰納的にその規則を見出し、その規則から演繹的に未来を予測することができるという考え方は、『二〇六五年』和訳をはじめ、西欧から輸入された様々な著作によつ

て広く知れ渡った。バックル、ギゾーの影響のもとに書かれた田口卯吉の『日本開化小史』(明10-15)には次のように書かれている。

以上に述ぶるところの事実に掲げて推論するに、およそ開化の進歩するは社会の性なることを知るべし。(中略) 社会の動くところ常にかくのごとし、英雄豪傑の爲すところ、あるいはその勢を早めあるいはこれを遅延せしむるにすぎざるなり。ああ、この理を推して将来を察せば我が国前途の事また予知することを得べきなり。(2)

『新体詩抄』(明15)にも「宇宙の事ハ彼此のノ別を論ぜず諸共にノ規律の無キハあらぬかし」と謳われていて(3)、明治未来記と呼ばれる作品以外にも、近未来を予想せんとする努力は、あらゆる分野の著作に顕著である。西欧的時間の観念の影響とも言えるだろうが、それが、未来記という、平安末期から存在した古典的ジャンルを近代的ジャンルとして再生させる努力を通して、社会に広められ、未来語りの様々な実験へと発展したところに、明治日本の特色がある。

否定的未来から理想的未来へ

社会、自然現象の根本にある規律を解明すれば、現在進行形の延長で捉えられる範囲の近未来は、予想や予知が可能であるという仮定のもとに、末広鉄腸の『二十三年未来記』(明18)は書かれ、未来記熱を全国に及ぼすことになった。しかし、ディオスコリデスの描く未来社会のイメージが当時の欧

米読者にとって十分魅力のあるものだったのに対し、鉄腸の描いた未来は逆に反理想像であり、国会開設が近づいているのに一般の意識が低いままでは予定通りに事が運ばないという危機感を煽ろうとするものだった。啓蒙思想、西欧的未来像に対する反発がその背景にあつたろうが、時間、歴史の觀念の変化という面から考えると、その当時存在した様々な問題を近未来に拡大して投影した反理想的未来像は、読者の関心をむしる未来ではなく現在に集める効果があつたと言える。政治小説と呼ばれる作品群には、同じような心理的效果をねらうものが多い(4)。過去を鑑として現在を正すのではなく、未来像を反面鑑として、後悔を先にたたせんとすること自体は新しい試みであつたに違いないが、そこに未来への憧憬、意欲は生まれえない。未来と現在に一對の対照的な価値を付加するという思考の構造は、江戸期に書かれた未来記——将来の流行を、当時の流行の反対像として茶化して書いた作品——と何ら変わりがない(5)。また、語源的に「未だ来たらず」という否定が内在する未来の概念は、未来記を叙述する行為によって語源にある否定性が克服されるものの、新たな否定的要素——不完全な現在が未来において罰せられる可能性に対する不安——が植えつけられることになる。

しかし、このような未来叙述を含む政治小説が、才子佳人的な結構をもちながら流行していったことを忘れてはならない。一組の才子佳人が、艱難によって試されながらも自由民権の理想を持ち続け、お互いにはのかな恋を抱き、恋の成就

て、「想像」という、推量を意味する漢語は、創造性をも含む imagination の訳語として使われるようになっていった。

否定的な意味を背負っていた未来という言葉は、こうして徐々に将来への期待を吸収し、生まれ変わっていく。「時事新報」(明19・12・6)の「社会時勢の変化すべきを思へ」と題す一面記事は、二十年近くの年月を経て、維新の頃が「殆んど別世界の事を聞くの想なり」という感想から始まり、以後も多方面での激しい変化には「必ず人の想像外なるもの」があることを述べている。そこには既に不安よりも、未来のもたらす驚きに対して、期待感や希望が溢れている。そして未来という新しい概念は様々な分野の人々を魅了するようになった。『経国美談』(明16)で政治小説を流行らせた矢野龍溪はその様子を『新社会』(明35)において次のように回顧している。

我が旧社会の晩年に経済政治法律道德諸科の学士仁人識者
者が近き未来を想像して驚悸を始めたる有様は如何なる
筆も之を尽くす能はざる程なりき(8)

二 恋と夢と未来

坪内逍遙の『内地 未来之夢』

万葉の昔から歌われる「こひ」は、明治期の才子佳人小説を通して、未来に対する憧れの換喩としての意味を負うようになった。そのことを一番明確に示しているのが坪内逍遙の

へと進む過程を描いた作品は多い(6)。明るい未来への夢を、読者が求めていたのである。勸善懲惡小説とともに前近代性をひきずっているように見えながらも、才子佳人小説の流行は、時間的、歴史的意識の上では、実はダーウィン、スペンサーの優勝劣敗思想、進化論的歴史観と密接な関係がある。恋の成就になぞらえた理想社会は、海を越えて探しに行く必要はなく、当然訪れるはずの未来にあることを、これらの思想は暗示するからである。ゆえに、才子佳人の恋の成就を描いた政治小説は、一種の未来記作品であつたと考えることもできる。

魅力的な近代的未来像を描くには、科学的知識、論理のみでなく、想像力を必須とする。ディオスコリデスは科学者でありながら、ファンタジアという想像力を体現する聡明な若い女性を登場させ、その友人レアリヤ(写真・現実性の象徴)よりも優れた力を持つとして、科学の進歩が想像力なしには不可能であることを強調した。このような西欧の思想の影響は、たとえば馬場辰猪の『天賦人權論』(明16)の中にもうかがうことができる。辰猪は、草木、汽船の例を用いて「宇宙間には自然の定規ある在りて、天下の事物は皆この定規に従わざるものなし」と説き、「ダーウィン氏の進化論のごときもその始めは一個の妄想説より出たるものなり」「スペンサー氏かつて曰く、およそ想像は確説の基礎となるものなり」と(9)と述べている。理からこそ想像が生まれ、想像が現実を生むことを提唱しているのである。このような叙述を通し

未来記『内地 未来之夢』(明19)である(9)。三人の中心人物の一人、渥美恭輔は、家業の酒造業を継がず、政治学、理学を修めた後、「財力の万能なる」を知り、日本の未来は商業にあると考えるようになる。方々で苦勞した後、醸造家に雇われ、商用で渥美はフランスからインド洋を経て長崎へ向かう。ある夜、夕闇が深まったころ、渥美は米国人ホウトン嬢と残月を眺めながら語り合う。二人が別れて船室に戻った後も、渥美は未来を思い、ホウトン嬢のことを考えている。「ホウトン嬢は……北海……風……浪……ホウトン……風……風」と、次第に強くなってくる風に気づきながら、夢の世界に運ばれて行く(10)。その直後、船は香港に着き、渥美が見なれた感じのするコーヒー店に入ると、そこにホウトン嬢がおり、二人はお互いへの気持ちを打ち明ける。渥美は船が揺れるあまり船室のソファから転げ落ちて、それが夢であつたことを知る。その後間もなく船が難破し、タイタニック号のような狂乱状態となる。渥美も波間にもまれるが、瀕死のホウトン嬢を発見し、必死に助けようとする。その後がどうなるかを書かず逍遙は筆を折ってしまうが、二人が後に相愛の仲となる伏線がここにある。

『内地 未来之夢』以前の未来記は、作品全体が夢中の出来事であつたが、ここでは愛慕する異性ととの再会のシーンが作品の一部として描かれ、その夢が覚めた後も、夢の内容が作品の筋の発展に影響を与えるような、有機的作用を持つ。そうした夢のかたちは、この作品をもって嚆矢とする(11)。作

品中の未来の夢が現在の行動を左右する過程、つまり未来、現在、過去がダイアログを持ちながらものが発展していく過程を描くときに初めて、未来は時間の概念に統合され、その不可分な要素として作動しはじめる。未完成な形でありながらも、逍遙はそれを試みようとしたのである。

露伴は逍遙のやりかけたことの意義に気付いていた。渥美が夢へと誘われる折に符号として使われた風の音は、『露伴々々』中、るびなが夢で愛する信日亜と邂逅する部分にもあらわれる。当時『露伴々々』の多くの読者は、『内地未来之夢』にこの場面の典拠があることに気付いたろう。露伴は後に想の作家と呼ばれるようになったが、実を重んじることの重要性を説いた逍遙から夢中の想像の世界の描き方についてヒントを得ているということは、興味深い点である。

るびなの夢と未来

露伴は逍遙からヒントを得て、夢をさらに革新的な語りの方場として用いている。そして、夢をみ、時間の流れ方を書き換えるのが若い女性、るびなであるということも画期的である。立身出世の人である文世武の、一人娘るびなは、文世武の出した新聞広告を通して世界から集まった花婿候補の選考が行われる中、外部との接触を断たれ、孤独な日々をおくっている。文世武の意図を知らないるびなは、父の圧制を恨み、苦しんでいる。信日亜を想うある秋の夜、るびなは「ひうと清み渡る音」を耳にする。風の音かと外へ出ると、笛の音で

になると同時に過去でもあることになり、未来、現在、過去
の三者は不可分で有機的な関係を持つようになる。

小室案外堂の「恋」と露伴の「恋」

ここで焦点を「夢」から「恋」に移したい。露伴が小室案外堂の『興亜夢恋々』(明17)の影響を受けていたことは拙論『露伴の出發と政治小説』に論じたが⁽¹³⁾、ここでは案外堂の「恋」と未来観との関連を探りたい。案外堂は『夢恋々』の「緒言」において、独自の「恋」の解釈を次のように披露している。

夫惟みれば。三千年前に鷲の高峯に雲がくれし月をしたふも恋なり。五十六億の後の暁を待ちて菫花の葉をのぞむも恋なり。厭離穢土とハ恋の歩を進むるなり。欣求浄土とハ男女の交りとす……悟道正覚の浮圖すら恋の道にハ洩れぬぞかし。花に狂ふ胡蝶の露の香をぞ恋ひぬる。雨に啼く蛙ハ小田の早苗を恋ふるなり。……況いて万の物の靈としあふがれて。心性の活動の妙なる人の身の。いかで恋てふ理なからん。(14)

動物の自然な欲求から、人間の浄土に対する憧れまで、魅了されるあらゆる感情が恋と表現されているが、それこそが、恋する対象に近づかんとする努力となり、未来を築く推進力となる。それは近過去、現在の状況の分析から論理的に予想される近未来ではない。ディオスコリデスが描いたような、こうありたいという、想像力と創造性を前提とした未来像が

あることがわかる。吹き手の顔を見ようと近づくと、それは他でもない、信日亜である。二人は垣根越しに話すうちに、文世武によってお互いの通信が阻まれていたことを知り、交わらぬ愛を告白しあう。そこへ靴音がして文世武が逢瀬の邪魔をする……というのが実は枕時計が五時を打つ音だったと、夢から覚めたるるびなは悟る⁽¹⁵⁾。

夢で恋する人の姿を見たり、言葉を交わしたりすることが重要な意味を持った和歌の伝統を踏まえ、露伴はこの夢中の邂逅をるびなの独立への推進力として用いている。それまで父親の圧制に対し不満を述べるばかりであったるびなは、この夢のあと、モノローグの中で次のように宣言する。

「……お父さんが何日ぞや、実力のない議論はたぬ、貨物の空な革囊は潰れやすいと仰やつたが、今日は女の命の主といふ尊い者が、主人の革囊に一杯はひつて居る、神聖の恋といふ者がつまつて居る。お父さんの猛勇な力でも無法の圧制でも、潰される気遣はない。」(第十九回)

るびなの精神的な独立は、信日亜との邂逅の夢、つまり、未来の予体験とでも呼ぶべき経験によって達成され、理想の未来像は、るびなの現在の行動に影響を与えるようになる。未来はその過程で、完了/未完了という二元的な区分における、否定的な「まだ来ていない時間」という元来の意味から、こうあってほしい、こうあるべき、こうあるようにと希求するイメージを持つ実存へと変貌を遂げる。また、未来の予体験によって、後、実際にその夢がかなった時に、未来が現在

そこにはある。

多くの政治小説のように、才子佳人の一組の男女の恋の成就になぞらえた、一国のみの理想的未来像には空間的自由がないが、ヨーロッパで教育を受けた中国人女性と世界を巡り、自由の価値を知らせんとする雷春に象徴される案外堂の憧憬、希求する精神は、自在に視野を収縮拡大させ、国境を越え、世界、人類の未来へと想像を駆り立てる⁽¹⁶⁾。さらに案外堂は古事記、平安歌人、また古代中国の、恋が歴史上に及ぼした様々な影響を例に挙げて、「恋ふハ上下の隔てなし」「恋に上下の別ちなき」ことを後半に述べ、自由民権の思想の基本に、恋の情が深く関与していることを指摘している。「公」の領域に属す政治と、「私」の感情、精神とを繋ぐ、歴史的に重要な発言であった。

露伴が案外堂をふまえていると考える理由の一つは、「しんじあは恋する人なり」(『露伴々々』第十五回)と定義していることにある。ただし露伴は案外堂を踏襲するに留まらず、ワーズワースを取り入れている⁽¹⁷⁾。「そもや恋のはじめは是を大にすれば神と人に起」ったとし、「恋」に、絶対なる存在への宗教的信仰をはじめ、親子間、兄弟間、男女間の愛情、さらに国、天下、後世を思う心さえも含めている。また、キリスト、釈迦を「見ぬ世の吾儕をまで恋にこがれ」た「恋知り、情け知り」と呼んでいるのは、この二人の預言者としての役割を表現したものである。人知の及ばぬ絶対智への、永遠に変わらぬ「恋」によって、さらに強い未来への推進力を獲得

することを、露伴は伝えんとしているのである。警醒演説家、信日亜は、そのような恋を抱いて、未来へと人類を導く人物だからこそ、未来を夢見る(予言する)ことができるほど強い恋を抱くるびなの相手としてふさわしいのである。

恋の成就と時間

結末では、意外にもすんなりと文世武に祝福され、るびなと信日亜のロマンティック・クエストは幕を閉じる。るびなと信日亜とは最初から相愛の仲にあるのだから、そもそも婿選びは失敗に終わることに決まっていたのである。メーテルリンクの「青い鳥」のように、二人の愛は苦難の中で追い求められ、「恋」にならなければ、その青さ、その強さは見えてこないことを見通して、この二人の恋を試すことが文世武の真の目的だった。面会も文通もかなわぬ二人にとって、過去の幸せな対話の記憶を喚起し、それを脳裏で再経験することによってしか、相手に対する尊敬、愛情を確かめることはできない。二人の恋は、過去への回帰を繰り返すことによつてのみ、未来への発展のエネルギーを得ることができるのである。

三 人間の時間と永遠

婿選びとは、実は文世武が自分自身のクエストを行う手段であった。立身出世の「恋」を達成し、老後を迎える彼がその結果得たのは、「従来尊むにたらずとせし宗教の価値を知

そこには、当時流行したフェノロサ、ペインの芸術観の影響が見られる。

逍遙の『小説神髓』に影響を与えたことで知られるアーネスト・フェノロサの『美術真説』には、「抑美術ハ……善良ナルガ故二人ノ愉快ヲ起こす」こと、「美術ノ妙想ハ決シテ変スベカラザルヲ以テ……常ニ己レノ憂苦ヲ忘レ、宛モ楽易富贍ノ世界ニ優游スルノ想ヲナサザルハナ」⁽²⁰⁾ということが述べられている⁽²¹⁾。もう一つ、当時広く知られていたと柳田が指摘する書に、英国の心理学者、アレグザンダー・ペインの *Mental Science* がある。その中の *Aesthetic Emotions* の論には、芸術の最も身近な目的は、快楽であることが述べられている⁽²²⁾。露伴はこれらの芸術論を念頭に置いていたものと思われる。

芸術が人の心を愉快にするのは、それが、一時の美しさ、感動を永遠に伝えんとするものであり、時間に対する唯一の抵抗の手段だからである。社会がこれまでにない速さで変化する明治日本に生きた人間たちは、時間の流れを強烈に感じているに違いない。芸術の創作、鑑賞に携わることは、目眩がするような変化の中で自らを失わないための一手段であったとも言える。芸術、風流の精神、また宗教も、方法は異なっているけれども、人間の時間を永遠なる時間とつなげようとする欲求が源であることを、露伴は伝えんとしている。

四 ワーズワースの時間

り、又た解する事なかりし風流の趣意を知る」(第二十一回)という幸福である。「宗教」とは、人智を超える絶対なるものの存在を自然科学的考察によって知ること、人智を相対化し、絶対なるものへの変わらぬ「恋」を抱くことを指しており、それが露伴の「方陣秘説」の趣意である⁽²³⁾。これは作中では婿候補の一人、吟蝸が書いたことになっているが、信日亜にもこの態度は見られる。またそれと不可分な関係を持つのが「風流」である。絶対なるものへの憧憬を報われぬ「恋」として捉えるのでなく、二者間の差異を尊び、この世の不完全な人生をその制限内で自由に生きるのが「風流」であろう。それゆえ、文世武が婿候補者たちに唯一要求しているのが「決して不愉快の感覚を抱かずして、常に愉快なる生活をなし得る」⁽²⁴⁾ことなのである。人間にとって、不愉快が生じる最大の原因は、死に至る時間の流れである。それに逆らったり、身を任せたりするところにロマンティズムが生まれる。最後まで残った婿候補者たちは文世武のテストで「不愉快」について所信を書かされるが、「及第」となる五つの回答は、どれもロマンティズムの異なる発現のしかたとして捉えることができる。しかしそのうち三つは不愉快をたんに否定する性質のもので⁽²⁵⁾、文世武はそれをとりあげようとはしない。第四の解答は国籍不明の詩人、たいらつくによつて「不愉快」を肯定的に捉え、叙事詩を書くことによるもので、「不愉快」を肯定的に捉え、叙事詩を書くことによつてそれを超越せんとする⁽²⁶⁾。時間の流れによつて起こる不愉快は、芸術によつて超越できるという考え方である。

ロマンティズムの文学を、時間を超越せんとする試みの表現とする研究は、西洋文学の領域でも少なくない⁽²⁷⁾。「露団々」の中で、特に超時間的体験が描写されるのは、るびなが監禁状態に置かれ、信日亜に想いをさせる第十一回である。そしてこの回こそ、彼女が相愛ならず鬱々たる生活をおくる中、夢で信日亜との邂逅を果たす重要な部分であり、信日亜と会えない現実を超えたトポスへとるびなが入り込む場面が描かれる⁽²⁸⁾。るびなはどのようにして、このような体験に導かれたのか。彼女のかたえにあるワーズワース詩集を開いてみることにしよう。そこには、たいらつくの場合と同様、詩によつて不愉快を超える精神が発見できるし、また、第五の及第解答、不愉快を「知らず」という吟蝸の精神を理解するための鍵を見出すこともできる。

文世武は、世間の取り沙汰からるびなを隔離するため、るびなを伴い、「英領かなたのおんたりお州、こうぼるく」へ避暑旅行に出かける。そこは「世に名高きおんたりお湖を北に受けて森林多く、湖のほとりには景色よきところも少なからず」あるところで、言わば北米の湖畔地域である。

るびなは一ト間の外にだも出ず、読さしのうおるづおすの詩集かたへにかいやり、窓越に蝶々の翼の如く見ゆる白帆真帆行かふ小舟を思ひ入りて眺め、いづくよりか吹き来る風に金糸の髪を梳らせて、黒き紗のうすもの豊かに着なしたる様、蠟石の神の像の如く、魂もあるかなまかに、吾を忘れて恍然と机に寄りかゝりし折しも、不

図見れば、部屋のこなたには相^{あは}思^{おも}花^{はな}あり。(第八回)

るびなの視線は、ワーズワース詩集から外の景色へ移り、莊子の蝶の夢を思わせる「蝶々の翼」のような帆が登場するところ、るびなの視線は再び身近なところに戻り、相思花に向けられる。が、既にその意識は瞑想、あるいは夢の世界に入り込んでいる。そこではるびなのモノローグが始まり、前述したように、信日曲への思ひが語られるのである。

これと似通った部分が、ワーズワースの多くの詩の中でも、詩人の精神の成長過程を歌った *The Prelude* (序曲) である。

… I told,

That once in the stillness of a summer's noon,
While I was seated in a rocky cave
By the sea-side, perusing, so it chanced,
The famous history of the errant knight
Recorded by Cervantes, these same thoughts
Beset me, and to height unusual rose,
While listlessly I sate, and having closed
The book, had turned my eyes toward the wide sea.
On poetry and geometric truth,
And their high privilege of lasting life,
From all internal injury exempt,
I mused; upon these chiefly: and at length,
My senses yielding to the sultry air,

Sleep seized me, and I passed into a dream. (V, 56-70)

夏の日、高く昇っている太陽を避け、岩屋にすわる詩人は、読んでいたセルバンテスのドン・キホーテを閉じ、視線を海に転じる。しかし意識は海の風景から内的風景へと移動していく。一つ一つの道具だては異なるものの、視線が本の世界から外の自然へ、そして内的世界へと導かれる過程は同じである。

露伴とワーズワースに見られるこの三段階の過程は、彼らが過去の作品を読み、その内容を内在化する過程と一致している。*The Prelude* の一人称の語り手は、脳裏にある城を探し求めるマン・キホーテの物語を傍らに置き、瞑想にふけることを描くことによつて、内在化されたセルバンテスのクエストを内在化する(25)。露伴は、ワーズワース詩集を座右の友とするるびなを描くことによつて、さらにそれを内在化していると言えよう。内在化するというのは、読んだ内容を後に記憶として喚起し、さらにはそれをメタフォアとして読み替え、書を換えるという行為である。るびなと信日曲が、お互いの言葉や行動の記憶を喚起し、過去の中に未来への示唆を発見し、再生のエネルギーを得る場面が何回も登場するのはこのためである。露伴は、ワーズワースの他、古今東西のテクニクからその修辭法の粹を抽出し、さらにはそれが一要素となるような新たな修辭法を、本歌取りにも似た方法で作出すことによつて、己の修辭法を超えようとする。それが露伴にとっての「翻譯」である。過去、現在、そして未来への展望が

How shall I seek the origin? where find

Faith in the marvellous things which then I felt?

Oft in these moments such a holy calm

Would overspread my soul, that bodily eyes

Were utterly forgotten, and what I saw

Appeared like something in myself, a dream,

A prospect in the mind. (II, 346-362)

身体的感覚が効かなくなる「逆」内的「眼」が開かれ、それまで見えなかった夢想の世界が見えて来るのである。また、次の一節でも同様に、理想世界へ誘われることが歌われる。

Imagination—here the Power so called

Through sad incompetence of human speech,

That awful Power rose from the mind's abyss

Like an unfathered vapour that enwraps,

At once, some lonely traveller. I was lost;

Halted without an effort to break through;

But to my conscious soul I now can say—

'I recognize thy glory' in such strength

Of usurpation, when the light of sense

Goes out, but with a flash that has revealed

The invisible world, doth greatness make abode,

There harbours; whether we be young or old,

Our destiny, our being's heart and home,

Is with infinitude, and only there;

連動した精神活動である。もう一箇所ワーズワースが登場するのは、文世武たるるびながゼネラス村に戻ってからで、るびなが信日曲への邂逅を果たす直前である。「密掛やよそよと動く風」とも、るびなは不思議な音に気がき、耳を澄ませず。

又聞えた様だ、……調子があつたようだが、……あゝあまり色々想ひ屈するので、気の所為で聞えたのだらう。

屋間読んだ詩集の中に、『夢よ、夢よ、あはれの夢よ、汝は何処より来りしや、汝は感覚といへる鋭き風の力弱き時、思想といへる柔らかき土の潤ひ多き所より、幽かに咲き出し花なれや。あゝ美し、あゝいたいけなり。なまあらはあれ、情なき風また吹かば、果敢なかるべき幻の如き香をのみ、人の胸にのこして、其色は白雲の上や吹き入れらるゝならんか、其俤は青海の底にや吹沈めらるゝならし』とある通り、妾は今感覚の力が弱くなつて心計り頻りに働いてゐるから、夢路をたどるやうな有様、……夢ではないかしらん、夢と現の境界かしらん。ひゅひゅひゅひゅ。ああ夢ではない、此方に聞えた。

(第十一回)

ここに登場する「屋間読んだ詩集」というのはワーズワース詩集に相違ない。先に引用した *The Prelude* の一節の終わりにも、感覚が蒸し暑みのために働かなくなり、夢の世界に入ることが出てくるが、次の部分にも、感覚——この場合は視覚——が作用しなくなることが描かれている。

With hope it is, hope that can never die,
Effort, and expectation, and desire,

And something evermore about to be. (VI, 592-608)

るびなが暗唱するのは「感覚といへる鋭き風の力弱き時」であるが、*The Prelude* の場合、上記引用の九〜十行の「感覚といふ光が消えた時」という表現と非常に近く、ワーズワースが *Imagination* と呼ぶのが、るびなの暗唱する詩の「夢」と等価であると見える。また総体的に見て、感覚で普段察知できるものが、感覚の力が無効になった時に察知できなくなり、外界との接触が絶たれた獄中のような状況となった時にはじめて、それまで見えなかったものを洞察できる力が沸き起こってくる、ということにおいて両者は一致している。

自由と時間

ワーズワースの "Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood" は、"The Child is father of the Man..." という前書きで有名である。人間がこの世に生を受け、成長する過程で、前世の栄光を忘れてしまふが、生まれた時は、それをまだひきずっていると、この頌には歌われている²⁸。吟蝸が不愉快を「知らず」と答えるのは、苦惱に満ちた世界で大人になっても、彼は子供の時の記憶を失わない、ということを目指すかもしれない。*The Prelude* で、語り手は次のような質問を投げかける。

五 風流と未来のための歴史観

文世武は、るびなの結婚披露宴の後、自分のための離別の宴を開き、自分は「既に人生の幸福の極点に達したれば足れり」とし、「人生の不幸の極点に達したる人を訪ひ尋ねて其不幸を癒やし救はんとて、吟蝸子を随へ世界漫遊に出るむねを演説して」(第二十一回)財産をほとんどのるびなに譲り、出発する。文世武は己の野望(恋)が満たされると、その「極点」の状態を維持しようとはせず、今度は以前とは逆方向の、過去を志向する「恋」を抱き始める。そして彼は未来から過去を眺め始める。世界を旅し、過去の自分のような貧しい人、不幸な人の力になろうとするのは、先に生まれ、先に夢を成就した人間の責任、義務というよりも、むしろ自然に湧き出る欲求であることを、露伴はこの文世武の最後のスピーチによって伝えんとしている。またそれは、国家間でも同様でなければならぬだろう。

個人や集団が、他人・他集団と交わることによってより明らかになってくることの一つは、甲の現在は乙の過去であり、丙の未来であるというように、様々な時間、発展過程上の時点が重なり合い、融合しあっていることである。そこには成敗禍福入り混じり、一つの法則を見出すのは容易ではない。露伴も後に『運命』(昭13)で「世おのじから数といふものありや」と問うていることは有名である。しかし進化論は弱肉強食の法則を見出し、人類の歴史に一つの方向性を与えた。

Oh! Who is he that hath his whole life long
Preserved, enlarged, this freedom in himself?

For this alone is genuine liberty: (XIV, 130-132)

この呼びかけに露伴が答えたかのような人物が吟蝸である。気の向くままに漂泊の旅を続ける吟遊詩人は、現世の辛酸を嘗めているにもかかわらず、不愉快を感じない全くの自由人と言える。彼の著すことになっている「方陣秘説」では、人智を超える天智の存在することを説いており、永遠、絶対なる力に対する憧憬を抱く人物として *The Prelude* の精神にもかなう。「風流閑翁人」と道教僧無名が七言絶句で呼ぶのは、吟蝸が時間の流れに掉さすタイムトラベラーであることを意味する。

露伴の風流の概念については緒論あるが²⁹、自由民権運動などの政治的、社会的背景との関連は指摘されていない。たとえば、風流と政治社会の関係を示唆する発言で重要だと思われるのは、読売新聞に掲載された「風流の主義」(明15)である。その筆者、成島柳北は、「自由ハ即ち風流の主義なり」と簡潔で力強い主張を述べている²⁸。そこには、幕府にも新政府にも批判的であった江戸人の、政治と美学との融合が見られる。柳北より一代ほど若い露伴の「風流」も、自由と密接な関係を持つ。二人の違いは、柳北が「風流」を主に政治的自由として考えていたのに対し、露伴は時間の流れからの自由、それによって可能となる精神的自由を第一に考えていたであろうことである。

その欠点は、それは強者の生存を正当化するが、強者が弱者にどう対すべきかについては参考にならないことだろう。当時もてはやされたダーウィン、スペンサーに対して、人民の、人民による、人民の未来のための歴史観とは何か、と露伴は挑戦を挑んでいるように見える。文世武と吟蝸の、弱者に対する福祉を目的とした世界漫遊は、世界全体を共同体としてこそ可能であり、人間個人、また社会には、向上する(恋する)余地が永遠に存在することを認識した行動である。「露団々」における「風流」とは、このような万民の幸福な未来への切なる願いが発端となって発展していった概念だったと言える。

- (1) 栗田香子「未来記の時代」『文学』第九巻第四号、参照。二つの和訳とは、近藤真琴の蘭語からの和訳、『新未来記』(明11)と、上条信次による英訳からの重訳「後世夢物語」(明7)。
- (2) 田口卯吉『日本開化小史』、斎藤孝編『歴史の思想』(社会評論社、一九九二)三三頁。
- (3) 外山正一「社会学の原理に題す」『新体詩抄』(丸家善七、明15)、三二頁。
- (4) 一番よく知られているのは、宮崎夢柳の『鬼歌々』等の、ロマンの虚無党にまつわる政治小説、また露伴自身の『雪粉々』であろう。
- (5) Kyoko Kurita, "Meiji Japan's Y 23 Crisis and the Discovery of the Future: Suehio Teicho's *Nijisan-nen mirai-ki*" in *Harvard Journal of Asiatic Studies* 60: 1 (June 2000), p. 6 参照。
- (6) 亀井秀雄氏は『悪性の変容』(講談社、一九八三年、五三〜五四

頁の中で、徳富蘇峰が『国民之友』社説で『貧寒書生夢物語』といつた類の政治小説の成功を批判していることを指摘し、その背景に、実にこのような作品が書かれ続けた事実を指摘している。鉄腸は『雪中梅』によって才子佳人の構造を取り入れ、ハッピーエンドとなる作品を書くが、未来を描くには至っていない。

(7) 馬場辰猪「天賦人權論」『自由自治元年の夢』(社会評論社、一九一一年)三六頁。
(8) 矢野龍溪『新社会』(大日本図書、一九〇二年)二九頁。傍点は省略。

(9) 露伴が逍遙の『小説神髓』を読んでいた事は、露伴自身語っているし、塩谷贊も書いている(塩谷贊『幸田露伴 上』中央公論社、一九七七年、五二頁)が、露伴が最も直接的影響を受けたのは『未来之夢』であつたと思われる。逍遙は未来記執筆が自分自身の文学理論に背反することから筆を折ってしまった。それによって未来記ブームが下火になつたことは拙論『Meiji Japan's Y 23 Crisis and the Discovery of the Future』に述べた。

(10) 坪内逍遙『未来之夢』第一書房、一九七七年)七〇頁。
(11) 『未来之夢』における夢は、『二〇六五年』和訳以来の未来記小説の政治性からも、日本でも知られていた中国古典中の「華胥之夢」「南柯夢」などの政治性からも開放されていることも新しい。
(12) 信口垂がるびなどの会話を思い出しているシーンでも、時計が鳴る音で我に返っている。時計の音を、夢想を破る無情の文明の器として扱う作品は、明治期に多い。

(13) 栗田香子「露伴の出版と政治小説」『日本の文学』2(有精堂、一九八八年一月)。
(14) 小室案外堂『夢窓々々』『自由新聞』明治一十七年四月六日、三頁。

(15) 『夢窓々々』は惜しくも中断されたが、主人公雷春は、最終回に氣球に乗って登場する、フランスで自由思想の教育を受けた中国人

一八八二年)。山口正一編『フェノロサ美術論集』(中央公論美術出版、一九八八年)所収。フェノロサの美術論が、逍遙のみならず社会に広く影響を与えていたことを、柳田泉も記している。柳田泉『明治初期の文学思想』下巻(春秋社、一九六五年)、九三頁上。「風流文学の詩歌小説戯曲などの見方にもそれぞれ眼に見える影響を与えたフェノロサ」の巻末に記す。

(23) Alexander Bain, *Mental Science: A Compendium of Psychology and the History of Philosophy* (New York: D. Appleton & Co., 1868). "The productions of Fine Art appear to be distinguished by these characteristics: (1) They have Pleasure for their immediate end; (2) they have no disagreeable accompaniments; (3) their enjoyment is not restricted to one or a few persons" (p. 290). 井上哲次郎の抄訳は『倍因氏心理新説』(一八八三年)として知られている。井上はこの第十三章を抄訳に入れているが、露伴はこれを英語で読んだか、または逍遙が東京専門学校で心理学の講義をした折に、大体はインゲンによつて読んだか、その筆記を読んだときとせられる。柳田泉『明治初期の文学思想』下巻、九五、九八〜九頁、参照。

(23) 例えば、文学における時間の研究は Georges Poulet は "Timelessness and Romanticism" (*Journal of the History of Ideas*, Vol. 15, No. 1, Jan. 1954, 3-22) にあつて、欧州におけるロマンティズムの詩人たちが、永遠なるものを現実の人生で体験する一つの方法として、現在に至る時間全てが同時存在するような「時間」あるいは超時間的トポスを追及したことを論じている。最近の研究では、特に Wordsworth と Coleridge に焦点をあてた J. Robert Barth の "Time and the Timeless: The Temporal Imagination in *The Prelude*" (1968) は、これは、Wordsworth の *The Prelude* にあつて、詩人自身が時間の経過を深く認識することによつて、時間を超えた精神世界に遭遇するということを論じて

女性と愛しあうようになり、二人で世界を旅して自由思想を広めるといふ結末にする計画だったことを、案外堂は明らかにしている。
(16) ワースワースの *The Prelude* (XIV, 188-192) は、花や動物、恋人や親などに対する、様々な "love" は、魂を自由にする永遠なる力。"Almighty's Throne" に対する愛がなければ無意味であることが歌われている。ワースワースの時間との比較分析は後述。

(17) 道徳僧、無名が示す天盤、地盤の奥義を、作中では吟蝸が書いて瓦龍に与えることになっているが、実際は露伴自身が書いている。この数学的遊びを紹介するのは、人間が無限の力を持つことを示すのではなく、世界がこのような数学的規則を持つように仕組んだ神の存在があることを示すためであり、「堅く智識ノ有限ヲ説カザルベカラズ」という主張が述べられている。「方陣秘説」の執筆年代は不明。「露伴全集」第四十巻所収。

(18) 「不愉快」「抱かず」という前半の二重否定には、「常に愉快なる…」という後半の肯定的表現にはない、時間的要素が隠されている。先ず、「不愉快」によつて「愉快」という基本概念を想起させ、「愉快」だけを提起した時には明らかではない二元性を露出させる。さらに「抱かず」と否定することによつて、人が「不愉快」な感覚を「抱く」ことが過去にも往々にしてあり、また将来にもあるであろう現実を示唆する。つまり二重否定は、過去と未来の認識の上に立って初めて可能な表現と言えよう。

(19) 第一の合格解答は「勇氣あれば即ち不愉快なし」とするもの、第二は「既往の習慣に執着せずして速に新来の事に従ふ不愉快なし」とするもの、第三は「唯るびな令嬢の歎息を得る時は大不愉快なれども其時は吾れ自殺すべければ更に」の「不愉快なもの」とするものである。「露伴々々」題十六回。

(20) この叙事詩の内容が、実は露伴自身が後に書く『雪粉々々』であつたことはよく知られている。

(21) マーネスト・フェノロサ述、大森惟中筆記『美術真説』(有精堂

1968) J. Robert Barth, S. J., "Time and the Timeless: The Temporal Imagination in *The Prelude*," *Romanticism and Transcendence: Wordsworth, Coleridge, and the Religious Imagination* (Columbia and London: University of Missouri Press, 2003), 41-55. Herbert Lindenberger は *On Wordsworth's Prelude* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1963) の第五、第六章を『序』の「時間認識論の費や」 The *Prelude* が過去の「みだなく」未来に「意識を向ふ」(19) の二言文に記す。

(24) 「馬は歩むを歩むを歩むを歩むを歩む」の句が始めに掲げられており、変化の心なる枯野の中を、単純な馬の歩み(時間の経過)に「進んでいく自分自身を、外から対象化して見る客観的な視点(時間経過の認識から生まれる、時間を超越した観念を得る)とを表現している」。

(25) Harold Bloom は、この内在化を "Internalization of quest romance" と呼び、19世紀初期のロマンティズムの特徴として、"The Internalization of Quest Romance," in Harold Bloom (ed.), *Romanticism and Consciousness* (New York and London: W. W. Norton & Company, 1970), pp. 3-24.

(26) William Wordsworth, "Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood," V, 58-66.

(27) 露伴の風流に焦点をあてた研究は、岡崎義恵「露伴の風流思想」(『日本芸術思潮』岩波書店、一九四八年)、二瓶愛蔵「露伴・風流の人間世界」(東苑社、一九八八年)が最も知られている。最近の研究には、三浦雅樹氏の二論文「露伴の『風流』観」(『国文学論集』22、上智大学国文学会、一九八九年一月)、「天命への移行——露伴の『風流』観」(同24、一九九一年一月)がある。
(28) 成島柳北「風流の主義」『読書新聞』明治十五年六月十五日「読書雑譚」欄。